

〔第七回日本言語文化学会発表要旨〕

日本文学における笑い—『徒然草』を中心に—

金 愛慶

(1993・12・4 発表)

I・

『徒然草』には数多くの笑話の説話形式を以て書き込まれており、その点から従来の先行研究では本作品の作者兼好をユーモリストと見る傾向が一般的であった。特に、『徒然草』における笑話は『宇治拾遺物語』の笑話とよく比較され、『宇治拾遺物語』の笑話に見られる寛容な人間理解の態度を継ぐものだと言われてきた。しかし、『徒然草』の一つ一つの笑話を綿密に読んでいくと、そこには寛容な人間理解ではなく鋭い人間批判を感じさせるところが多いことに気が付くのである。従って、こうした疑問を踏まえて、もう一度改めて『徒然草』における笑いのとらえ方を考えてみようと思う。

II・

それでは、先ず、『徒然草』の中での笑いの場面の描写を通じて、笑いに対しての作者の認識を探ってみることにしよう。

『徒然草』には、説話形式で語られた笑話以外に随筆的章段においても笑いの場面を描いた文章が散見されるが、それらの笑いは大概否定的にとらえられている。例えば、第30段には、たわいもない事をいいながら笑う場面が書かれているのを始めとして、第56段には、笑う行動に対する作者の慎重な態度が示されており、また、第78段にはいやしい笑いへの非難がある。他にも騒がしい笑い、嘲笑いなど、『徒然草』に取り上げられた笑いの場面は243段を除いては、否定的なものばかりであり、そのような笑いに対して、作者は興味を示すどころか、それらの笑い手たちとの間に一線を画し、冷静な目を向けているのが読み取られる。従って、こうした笑いのとらえ方は『宇治拾遺物語』における笑いのとらえ方と決して同質のものとはいえないと思われる。

『宇治拾遺物語』の笑いの場合は、編者自身が一つ一つの笑話に興味をもって、積極的に書き伝えようとする態度が窺われるし、笑話の中の笑い手たちに共感し、彼らとともに面白い事件を興じている事が想像出来るのである。

こうしたところから見ると、笑いに対する、『徒然草』の作者と『宇治拾遺

物語』の編者の態度には根本的に違いがあるし、特に、『徒然草』の作者兼好の場合は、面白い出来事を単純に興じることに對して抵抗感を感じていた、やや屈折した性格の持ち主であったのではないかと思われる。

Ⅲ・

では、次に、『徒然草』の中で取り上げられた笑話の性格について検討しながら、『徒然草』における笑いのとらえ方を明らかにしてみたいと思う。

『徒然草』には、笑話と見做すべき章段が16段ぐらいあるが、それらの各々の話を内容別に分類してみると次のようである。

- ① 4 5 段：あだ名に関するユーモラスな話
- ② 4 7 段：人を微笑に誘う素朴な人間味を描いた話
- ③ 5 2～5 4 段：法師たちの馬鹿げた行為を冷笑した話
- ④ 8 6 段：言葉の洒落（機知）による話
- ⑤ 8 8 段：珍しいものに対するの盲信的な人間の滑稽さを風刺
- ⑥ 8 9、2 3 6 段：無反省な感激に溺れやすい人間性への皮肉
- ⑦ 1 0 3、1 3 5、1 3 6、2 2 6 段：謎々や知識試し等、貴族社会における遊びの場面における笑話（主に、人の弱点をからかいながら面白がる人々と、それに傷つくひとの話の内容とするものが多い。）
- ⑧ 1 0 6 段：高野の上人と馬の口取りの男の話として、滑稽の底に人間的、性格的把握が存している。
- ⑨ 1 2 5、1 5 2 段：高僧の風貌などに単純に感激することへの皮肉
- ⑩ 1 9 5 段：高僧の滑稽な言葉を通じて、崇高さと滑稽さとの相関関係を示した話

『徒然草』の笑話は、②と④の一部の洒落による笑いを除いては、人間のおもしろおかしい本質を描いた滑稽による話が殆どを占めており、そういう面では『宇治拾遺物語』の笑話の扱い方と似通うところがあるといえよう。ところが、『徒然草』と『宇治拾遺物語』の笑話において取り上げられた笑いの性格には、次の点で違いがあると思われる。

『徒然草』における笑いは風刺性が強く、そういう点で、『宇治拾遺物語』の笑いに主に見られるユーモラスな性格と対照的だと思われる。即ち、『宇治

拾遺物語』の編者が笑話において様々な人間に深い興味をよせながら、人間の滑稽な姿に対して、教訓や啓蒙の意識を示さず、寛容に理解する立場に立っている反面、『徒然草』の笑話の作者は一つ一つの笑話における滑稽な人間性に対して鋭い批評の目を向けているのである。従って、『徒然草』の笑話は、大概において、簡潔にまとめられた話が多く、このことから作者は、話そのものに興味を持つというよりは傍観者的な態度をもって臨んでおり、なお、話の主人公たちとは常に距離をおきながら、かれらに対して一種の優越感さえ示していることが窺われる。

このように、『徒然草』と『宇治拾遺物語』における笑いの性格の違いは、一言でいうと、風刺とユーモアの違いに起因するものであり、言い換えると、『宇治拾遺物語』との比較を通して明らかになった『徒然草』における笑いには鋭い人間批評に基づいた風刺的な要素が強いと言えるだろう。

IV・

それでは、次に、前述した笑いの性格を示している笑話の例を『徒然草』と『宇治拾遺物語』の中からあげることしよう。ここでは、特に、『徒然草』と『宇治拾遺物語』において、頻繁に笑いの対象となっている法師にまつわる話として、『徒然草』の53段と144段、そして『宇治拾遺物語』の第5話を選んでみよう。

『徒然草』の場合、53段では酔っ払った法師の馬鹿げた姿を描き、144段では信仰心の深い法師の純情でありながら無知な姿を描くなど、それぞれ違う視点から法師の滑稽な姿をとらえているものの、いずれの話においても人間性への批評が示されている。

一方、『宇治拾遺物語』の第5話の法師の場合は、彼の滑稽さが皆の笑いものにはなっているが、しかし軽蔑されているより、ありのままの姿として理解され、寛大に見られていることが読み取られる。

以上、今回の発表では『徒然草』の笑いの特性を『宇治拾遺物語』の笑いと比較しながら取り上げてみたが、こうした笑いの研究が、今後、作品や作者の研究に少しでも役立つものになればと思う。

(人間文化研究科 比較文化学専攻 三年)